

ドキュメンタリー「もうひとつの『14才の母』」を見て

年末年始に録り貯めしていた番組を徐々に再生して見ている。

その中に、暮れまで放送されていたTVドラマのタイトルに絡めたのか、深夜帯に放送されていた「もうひとつの『14才の母』」のドキュメンタリー番組を見た。

中学生の妊娠、中絶、また、その後の出産、育児に直面している幾人かを取材し、また、こうした危なっかしい中学生の相談に寄り添う産婦人科医の取材で構成されていた。

「今、中学生3年生の女の子は、10人に一人はセックスの経験があるらしい」とのナレーションには、ビックリ！

これが、今の十代の性の現状なのだろうか……。

以前に当HPでも触れたデートDV（「雑学BN」の書籍等読後感関係（Ⅲ）P、2006.09.20.「『ヒューマン・セクソロジー』って、ご存でしたか？」：参照）による妊娠も多いのだろうか。

Drは、心の居場所のない少女たちが恋人との関係にそれを求め、その中で体を求められるのを拒否し難いのだろうかという。

肝心の要因の心の居場所がなければ、「セックスをしないように！」と諭しても、その繰り返しになるだけだろうという。

そのために、セックスや妊娠のことを親にも友にも云えずにいる少女たちに、24時間自分の携帯を解放し、「いつでも、たくさん、たくさんメールを寄越すように！」といい、少女たちに寄り添うことで心の居場所を感じてくればと日々努めているよう。日に200件以上の相談メールがあるとか。

ふと思うのだが、こうした問題の番組では、少女たちや支援する方が取材対象になりがちだが、相手である危なっかしい少年たちの取材を殆ど見かけないのは、どうしてだろうか。

心の居場所がなく、少女たちにそれを求めるのは少年たちも同じでないだろうか。

この共通する側面に踏み込む対策を考える社会にしていけないと、未成年の人工妊娠中絶はそう減少しないだろうか。

更に、未成年の人工妊娠中絶は年間3万件強（厚生省、保健・衛生行政業務報告）が、いっこうに社会問題化されない、この不思議。

だって、少子化対策は国の重要課題であり、また、自殺者が年間3万人を越えことは社会問題になって、自殺者減少のための対策が整備されつつあることからみて、行政施策はどこかちぐはぐと感じませんか？